

草平庵プロジェクト —川の記憶のデザイン—

The Sohei Project —Design for Place and Time—

今井 裕 夫

Hiroo IMAI

船 曳 悦 子

Etsuko FUNABIKI

Abstract

When considering what is important to the revitalization and attractiveness of a city, from an literary or artistic viewpoint, the novelist Morita Sōhei(1881–1949) comes to mind. Born in the Sagiyama district of Gifu City, Morita was a leading disciple of the novelist Natsume Soseki. In 1973, the Morita Sōhei Memorial Hall was constructed to honor his literary accomplishments. At the site are gardens and Shō-an, Morita's former residence. Due to deterioration of the buildings and surrounding gardens over the years, the author recently undertook a project to restore the site. Originally, Shō-an had been located on the banks of the Nagara River flowing through Gifu City. However, successive river management projects over the years have resulted in constraining the river to a single waterway. Consequently, Shō-an and its gardens are now located far away from the Nagara River. In order to restore the original riverside atmosphere of the site, a concept of a “Design for Place and Time” was adopted for this project. Rather than creating a new radical design, the guiding factor in the design was the recreation of the original, yet fresh sense of place and time.

Key words : 親和力、地勢、蘇生、気風、水鏡

はじめに

文学、芸術的視点から「街おこし」所謂、都市の魅力の見なおしと再生から蘇生を思考する時、岐阜の郷土出身者では、文学的風土の地平から、森田草平と小島信夫の名が偲ばれる。森田草平（1881–1949）は、岐阜市の鷺山に生誕し、夏目漱石の高弟の一人である。ダヌンチオの「死の勝利」の影響で死を美化し、平塚雷鳥との心中事件を起こし、それを主題とした小説『煤煙』がつとに著名である。1963年に文学碑、1973年に草平庵（森田草平記念館）が建設され、その庭と共に現在に至って

いる。ゆかりの人の熱意で懐かしい親和力に富んだ場所として、現在まで維持されているがそれらの人の高齢化と周囲環境の劣化及び施設の整備の中で可能な限りの蘇生を勘案する時、昔の場所のそのままの復元であったり、場所の親和力とは遠すぎる極端に抽象化された概念の構築ではない、新しいデザインの展開はないかという思考の中で“記憶のデザイン”という概念が構想された。



明治24年の岐阜市鷺山付近



現在の岐阜市鷺山付近

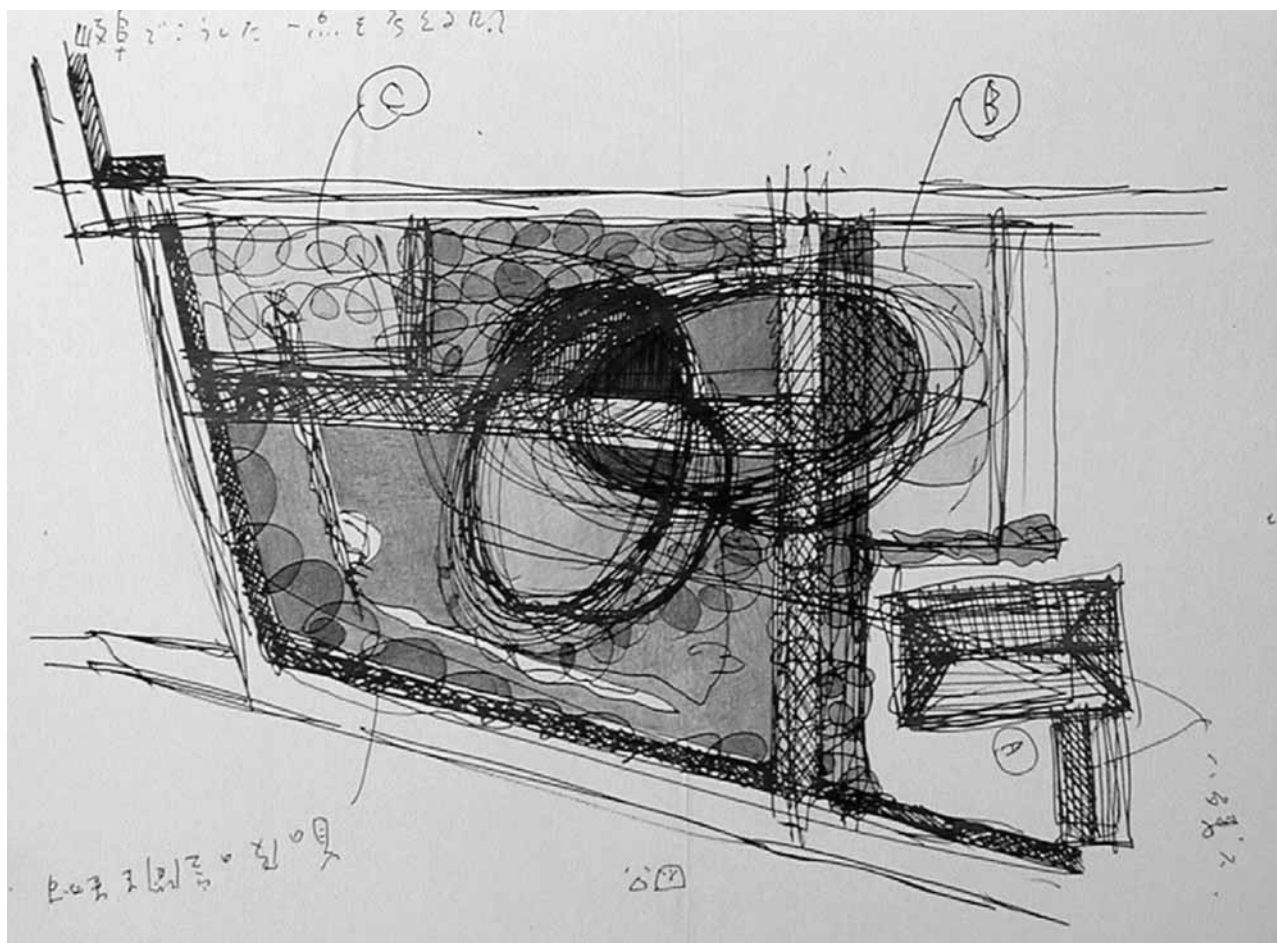


第1次スケッチ案（完成案）模型

1 場所と地勢の理解

敷地の南側に辿る小路を、思いの外清らかな水の流れる水路に沿って東からのアプローチをメインアプローチとする。アプローチを誘うこの水路は現在も農業用水として使用され、この地点からもう少し南東の崇福寺地区近くの長良古川の川原から伏流水（井戸水）として汲み上げ放流している。美しい筈である。用水に沿った小路は計画されていない旧路のもつ曲がりや膨らみと凹みを含みながらその雰囲気を形成している。敷地の西側正面に鷺山が佇んである。見返って東を見ると金華山が予想以上に近く見える。この小路に沿ってかつて長良古川の堤防はあり、現在はないが南側の敷地は一段高く、かつて土盛（土居）であった地勢の名残りをとどめている。古老の談話であるが、鷺山輪中堤の一端である。このことは、この付近一帯を掩う地勢特有の大きな空間の質と照応している。草平庵の南西角でこの水路は北に向って折れ、敷地北側と接する旧路を潜って、西に折れず北に折れ、鷺山の字を貫いて、下土居方面へ流れ、正木川の水門に至る水路へと繋がる。水路に沿っての敷地南西角付近の小路の膨らみと西へ直進する道路の狭隘口の形状は、この場所の大きな空間の質を一層際立たせている。水路の護岸の水際は30cm程度の長良川の玉石の馬踏み積みであり道路面との際辺は土の法面であり、野生植物の繁茂地と

なっている。（実はこれも所有者である安藤夫人の仕業であるが・・・）敷地北側の道路は古くから鷺山の字の中心的な道路であり、東に崇福寺・福光、西へ鷺山・北野神社を経て正木・繰船橋を渡り、黒野へ抜ける。現在も昔も幹線道路である。2間（3.6m）程度の道巾である。改修が施されているが、土蔵と農家・離れ屋で前庭を囲った典型的な農家の造りもまだまだ散見出来る。字の内で直交する道路でも曲がりがあり、かつての字らしい雰囲気が漂っている。垣根・植木・果樹のバラツキもよく、東側へは、現在の幹線直路へ500m程、西へは鷺山の懐域の感があり、西風を鷺山が塞ぎ、場の質としての穏やかさと鷹揚さを増幅する地勢となっている。敷地の東西角は、現在は別の人の所有であるが、かつては森田邸の一隅であり、この典型的な農家を然とした家と離れ屋は、家の形状といい、離れ屋・垣根・庭木の具合まことによく、水路との絡み、特にかつての野菜の洗い場然とした水路へ降りる階段それに懸かる桜の大樹、道路の撚り、小橋の関係が絶妙であり、この一隅の魅力を倍加させている。その桜の大樹の傍らに森田草平が登って遊んだと謂れる、柿の大樹〔草平柿〕がある。健在である。東北角もかつては、森田邸の一隅であったと思われるが、巾一間程の袋小路が北側道路から南進し、その道路に面して、新建材による新屋（二階建）が三軒所狭しと建っている。現在

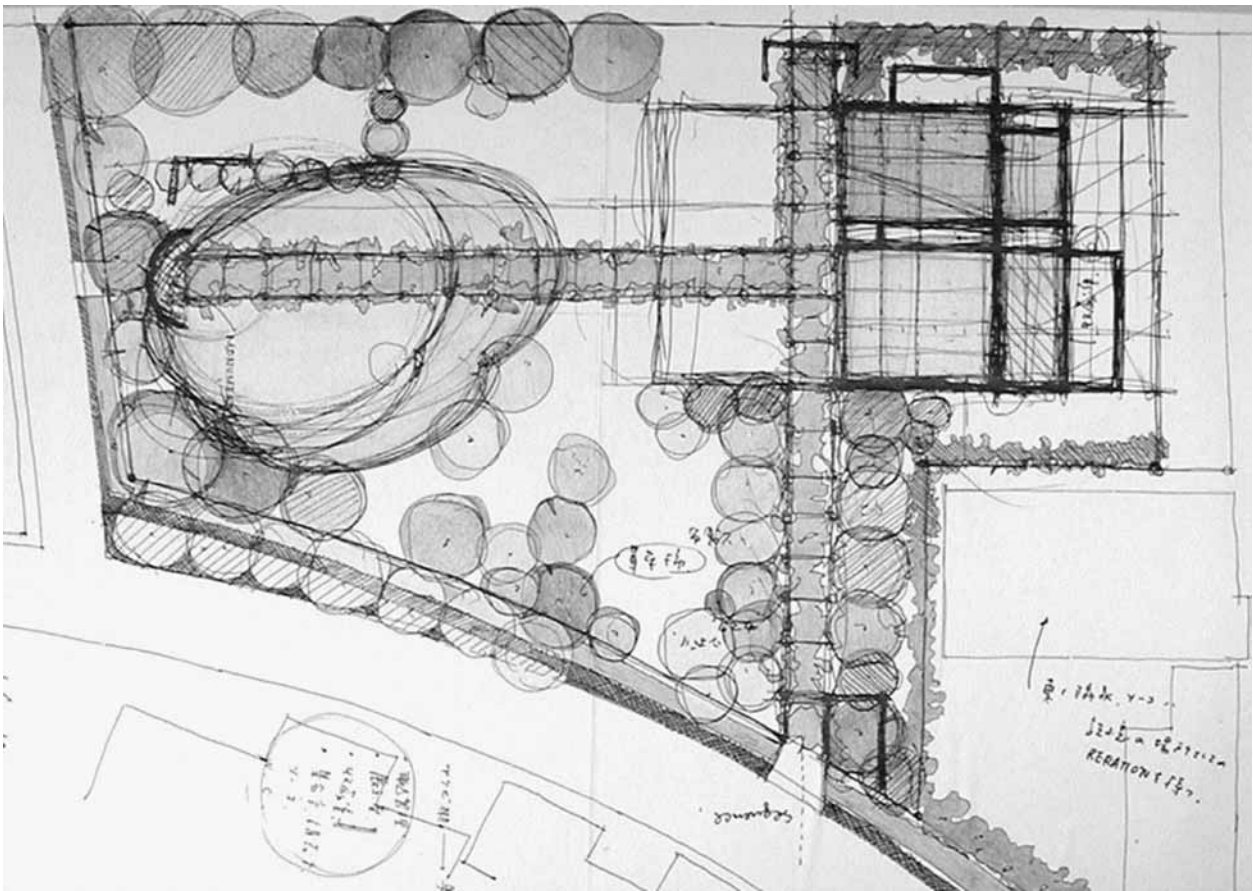


第1次スケッチ案②

の草平庵を容作る敷地内は、現在の所有者で草平庵の庵主である安藤氏の主屋が南側道路から庭木に充ちた前庭と深い路地を形成しながら北側道路と並行し建っている。西北角は子息の新家が主屋と並んで建っている。南側道路から路地に入った直ぐに文学碑が三つあり、現在の草平庵に導いている。これは、安藤氏の個人の所有であり、安藤氏はかつて森田草平の小説の挿絵を描かれた画家であり、今は亡くなられたが、安藤夫人がその庭と共に現在も美しい野趣溢れるに庭を維持されているが高齢が気に掛かるところである。現在の幹線道路から、騒音が届かない程合いに外れ、かつての農村の穏やかさを含み南側には長良古川に対する鷺山輪中の川辺際の鷹揚な空間の質を湛え、長良川の伏流水の清水が「字」の中心部を巡り、それに沿ってこの一隅は低く刈り込まれた多くの庭木と共に佇んでいる。押し寄せる新建材の建物や造作の氾濫を目前にこの小さな庭と森を再生し、水路を蘇生し、文学による人間の心性の問題の解決と環境の再生、都市生活や観光の魅力の基盤部として、止むにやまれぬ環境や社会状況の劣化を背にこの計画案は構想された。この計画案に岐阜の魅力の再発見と再構築に繋がる小さい転回点として意味を内包させるのと同時に現実的には場所への憧憬や理想に基づいたオマージュでもある。これを実現するに

は(B)の三軒や敷地内の主屋と現草平庵と(C)の一軒が雑木林や森に変わることも含めてある意味では絵空事]であり、色々な意味で現段階での実現がいつの日か森に変わればという現実主義的なワキマエを含んだ構想である。

偶然に「草平」の名を刻んだこの一隅が、こうなるといいなという現実的には脆弱な基盤からの立ち上がりであり、こうして「草平庵」そのものの状況や文化や芸術から都市の魅力の蘇生状況はそのまま重なり、現実となると利害がからんだ様々な意見を取り入れてしまい、よい結果が出せない状況からの離脱をこの計画案はめざしている。無駄に使われてゆく時間やお金以上に失われてゆく「美」がもったいない。このような環境の劣化が続くと、そこに宿っていた美意識そのものが消滅してしまい、こうした状況は昔のままがよいという結論しか産み出し得ない。これも環境を創造する者としてやりきれない。人間は最終的には心や精神のやすらぎを求めて彷徨するのであれば、自然と環境から学ぶ視点と場所を都市の日常性の中に蘇生させる以外ないと考えた。場所や時間の記憶を収斂する美意識の中に野生の復活を内包させたのがこの計画である。「草平庵」の現実は今ここに在る。



第1次スケッチ案③

2 CONCEPT

- ・森田草平の人間性 [フトコロ] を空間として表現する
- ・深く真実を愛する者の Reflection としての親和的意味を空間として表現する。
- ・男女の機微
- ・もちろん建築でもあるが、アプローチや水路、路地や庭、林を含めた懐かしい場所を作ることである。
- ・明治の時代が持っていた精神の豊穡さやおおらかさを表現すること、したがって建築のみではなくその場所の空間全体への (気) の体験が庭をめぐる行為の意味を含めて精神の磁場として成立すること
- ・草平の心情の根底 / 核心に迫る形 心臓—硯—池、空間を表現する。
- ・古川の [毛] である水路の Design—玉石垣、補修、整備 (毛→正木川 [尻] →鳥羽川→長良川) 古川の川縁・川岸を形成する鷺山の字の一隅
- ・森田草平文学賞の設定 文学的風土の確立、つまり気風を醸成させる→花束で紛らわすことではなく小さな苗を植えること
- ・地勢的なことを Design する→包摂 (Subsumption)
- ・場所・雰囲気・風土 (地勢・土地なり) 生り、成り、形態空間の質 : おおらかに・のどかに・ゆったり・のんびり

- ・封建的な [家] からの脱出

3 ELEMENT

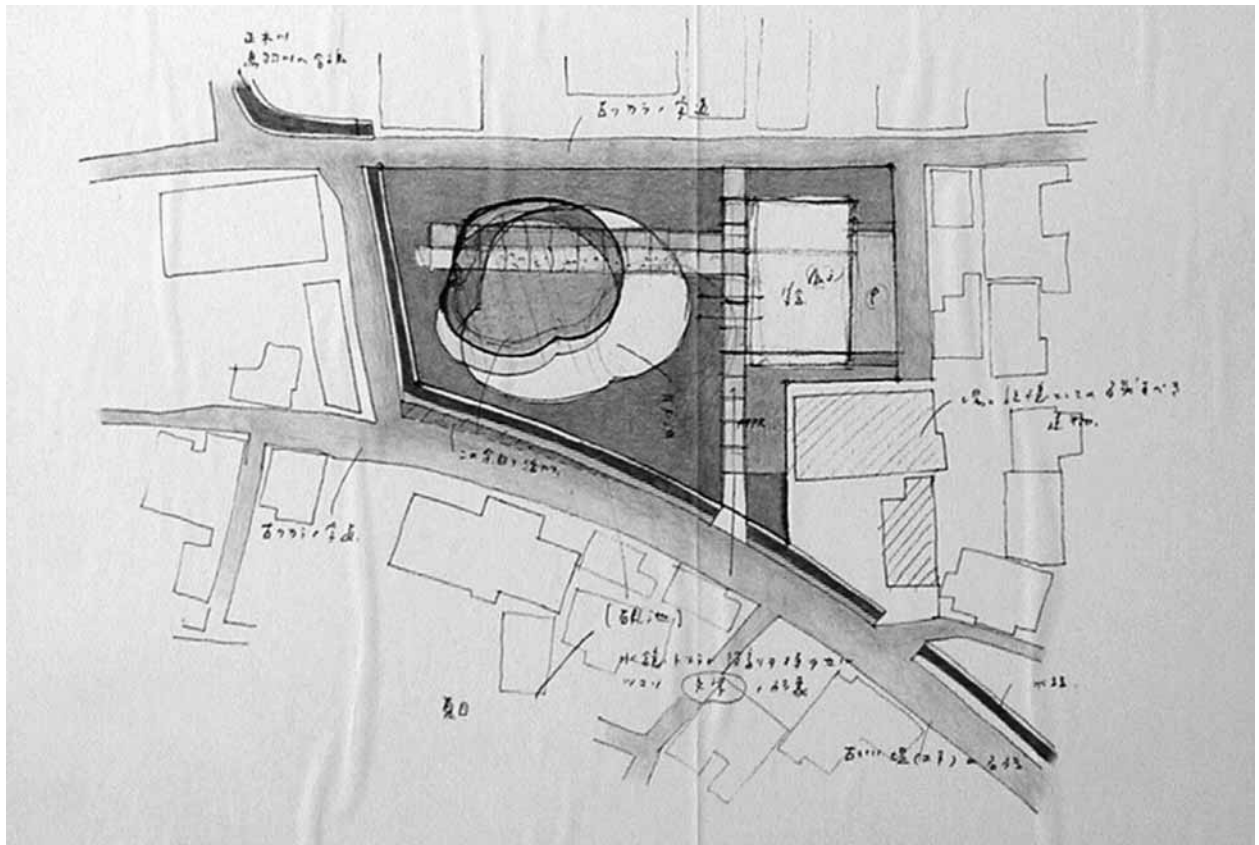
- ・庭—小路—林
- ・水路、緑、水の溜まり
- ・道路 (膨らみ) —植栽—余繞地の利用
- ・周辺家屋の景観の補修
- ・現在の素材で語ること—復元・修復が主題ではない
- ・建築は森田草平の精神に現代的意味を感じさせ、現代に蘇生させる場所とすること
- ・潤い、湿り、しっとりした趣、情味、情念の苛烈さ展示、集合 (ホール) Approach→庭と一体の磁場として構成する傘アケビ棚 WC 倉庫
- ・水鏡—川の記憶
- ・石鏡—石畳の池 (長良川の玉石の割肌敷き込み) →眠りの枕とする すずり池 夏目漱石からの拝領の硯 (夏目漱石との絆)
- ・森鏡—雑木林・野草 (川辺の植物に依る)

4 条件の整理

[A] 周囲の現況

- ・森田草平に所縁をもった人々が生存していること—高齢化

草平庵プロジェクト



第2次スケッチ案③

東南角（A）[北川氏]講演会に来られて質問された。

協力的である。草平庵周辺環境の保全のためにどのようなことをしたらよいか。

金華山方向の景観の保全に重要

建物・庭共現状の若干の補修で完了する。

- ・森田草平に愛着を持った人が生存していること
- 主屋・現草平庵の所有者[安藤夫人] 理解者
- M29草平の隣家生 森田つねの従弟（ご主人は安藤芳流（画家）—『煤煙』（挿絵）森田草平の小説の挿絵・装幀
- ・資料が散逸していないこと[安藤氏所有]
- （図書）岐阜市立図書館へ寄贈
- 資料Ⅱ（研究者：根岸正純）
- 岐阜市立図書館へ寄贈
- 文鎮、万年筆、眼鏡 他
- 林正子教授（研究の後継者）岐阜文学散歩2003年8月6日
- 講師（タウンウォッチング）岐阜市（財）岐阜市にぎわいまちづくり公社
- ・西北角（C）[安藤氏の子息]
- 感触 やわらかい人
- ・敷地の周囲の協力
- 素材と色彩・堀（目隠し）による協力
- ・交通標識・カードレール・電柱・看板等の除去協力
- ・水路の未整備（好条件）-石垣護岸・彫刻化・道路の公園化

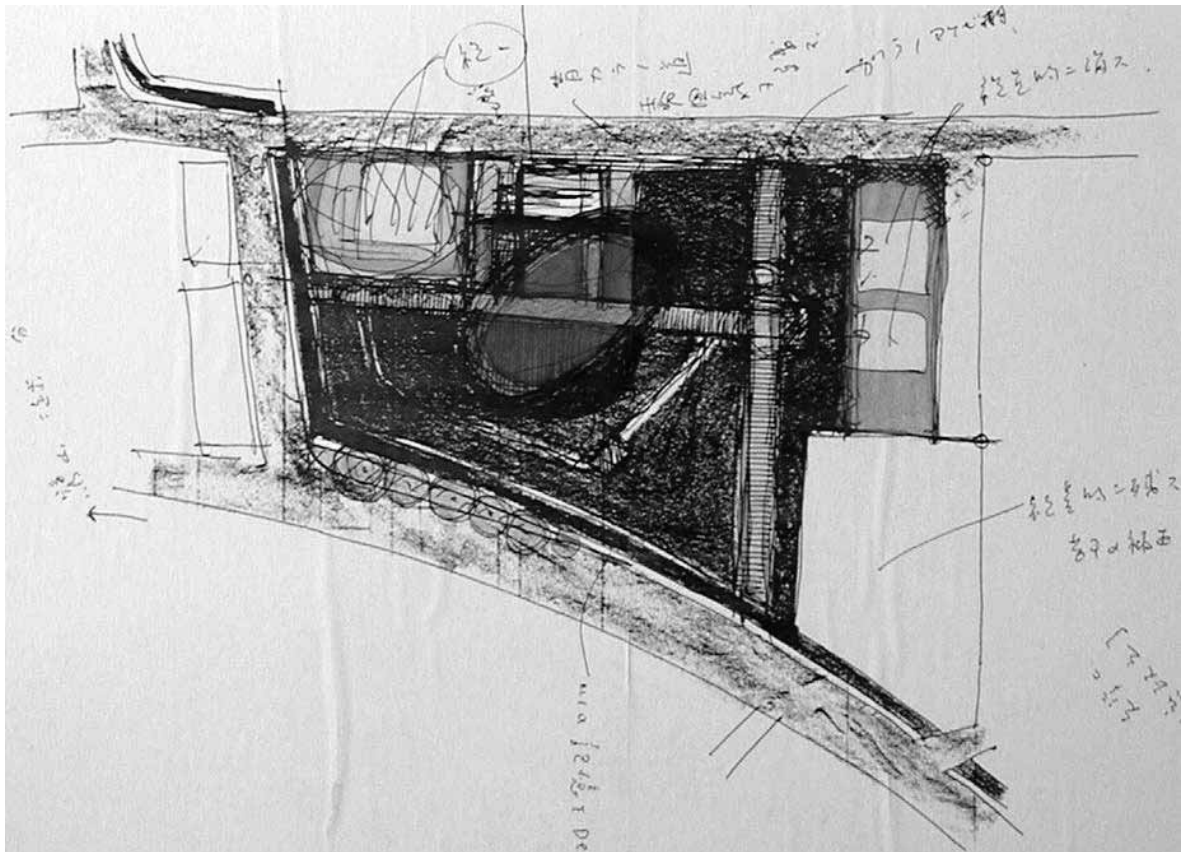
[B]主たる植生

東南角（A）隣家の植生

- ・基本抹消庭南側、用水及び西側草平庵→植垣
- ・柿の大樹—[草平柿]伝説の樹
- ・水路に沿って桜の大樹
- ・果樹 榎樺（カリン）・柿
- ・樹 常緑 椿・藪椿・榎・檉・クロガネモチ
- 落葉 紅葉・桜
- ・低木 満天星・伊吹
- ・野草 フキ・両万・ハラン・ツルニチニチソウ・藪カンゾウ 他

主屋・現草平庵の植生

- ・多様な種類の樹木の庭で低く狩り込まれ高木がない処が魅力
- ・南側・西側水路に沿って桜並木を意識している。それは、東南（A）の敷地内にも繁っている。
- ・大らかな空間の質を持ち、小路をめぐる庭として構成がある。
- ・アプローチは、文学碑・草平庵・主屋との流れで小路が構成される。床仕上は石タタミである。
- ・果樹 榎樺（カリン）・柿・梅
- ・樹 常緑 山茶花（紅・白）・榎・^{キョウチクトウ}夾竹桃・金木犀・松
- 落葉 梅・桜・イタヤ楓・楓・紅葉・ムシカリ・花水木・ウメモドキ・婆羅双樹・^{シモクレン}紫木蓮・コブシ・老梅・サルスベリ・朴



第2次スケッチ案①

- ・低木 アジサイ・姫芙蓉・芙蓉・マンサク・伊吹・レンギョウ・榊・マユミ・ウツギ・サツキ・躑躅・ナンテン・ヒューガミズキ・トサノミズキ・茶・ツゲ・萩・ニワトコ・^{レンギョウ}連翹
- ・野草 石蓀・水仙・ヒトツバ・ハトムギ・^{ジャノヒゲ}蛇の鬚・フキ・ホトトギス・カタバミ・藪柑子・ミカエリソウ・ホタルブクロ・ザゼンソウ・ヒゴスミレ・薄(芒)・アケビ・タマスダレ・天南星他

5 第1次スケッチ案(理想案)

- ・敷地 東南角(A)は、建築、庭木 必要。(補修 建物・庭)所有者に関係なく現状のまま景観にとって必要。草平柿、水路階段
- ・敷地 東北角(B)は、景観にとって不必要
(堀・垣根による目隠し又は、新庵の建築場所として構想)
- ・敷地 西北角(C)は景観にとって不必要
(森と庭の復活、代替地で解決できないか)
- ・敷地内の建物
(主屋・庵・ソーコ・温室)不必要
(庭木・野草)必要
- ・文学碑は現在地を尊重する。(移動も可)
- ・東側からのメインエントランスとし、東南角隣家の横垣に

沿って北上させるアプローチとし北側道路までの空間の Sequence を確保する。草庵は直接見えない。[第1次スケッチ案①]

- ・回廊式の庭、巡る庭がこの場の要求とすれば、川原辺や山辺の野草であるアケビの棚を錆びない極端に細い金属で作成する。[第1次スケッチ②]
- ・(C)の南側の敷地に沿う方向にアケビ棚を直交させ草庵の正面性と連続させる。
- ・回廊式の庭・巡る庭には、水の記憶がしみ出る池がイメージされた。水路からの入り水池の構想も捨て難いが、夏目漱石からの縁である硯のフォルムが池であるならば水の記憶がしみ出る硯池を取った。会津八一の南京新唱“ワギモコがキヌカケヤナギ...”に影響された。[第1スケッチ案③]
- ・敷地北側は、落葉樹の並木又は雑木林とし、北側農家との景観を繋げる。
- ・並木は可能な限り現在の植生を残す。野草は多様であり保護する。
- ・草庵は軒を低くし容積を大とする空間構成とし、周囲に圧倒しない低層(二階建口フト型)を採用している。アケビ棚と連続させる。
- ・駐車場は別に設ける。
- ・南側・西南角の水路の護岸の長良川の玉石の割肌の彫刻積みとする。硯池も長良川の玉石の割肌面のモザイク貼とし、長

草平庵プロジェクト

- 良川の玉石としたのは、上流の地勢の記憶を含めて長良古川の記憶であることだが、例えば木曽川の玉石より色彩・種類が多様で割肌貼の美しさを最大限引出せる素材と考えた。
- 水路の護岸・西南角の道路の膨らみの野生化・硯池・アケビ棚は草平庵と等価のエレメントと考える。
 - 東南角の隣家と庭木は、元の生家の気風を残すという意味で最重要である。

外装	木部	キシラデコール・柿渋・タール塗布による補修
	金属	コールタール・又オイルペンキ塗布
建具	木製	キシラデコール・オイルステイン等による古い建具との色合せ
	金属	黒又は鉛色系による色合せ
床		玉石又は豆砂利による洗出し仕上（モルタル又コンクリート）

（提出期日 平成15年12月10日）

6 第2次スケッチ案（現実案）

- 計画案と言えども少しでもリアリティを持たせる為、権利者を少なくした案
- 敷地 東南角（A）…建築・並木共〔必要〕…補修程度
- 敷地 東北角（B）…建築〔不必要〕…目隠し（垣根・塀・新庵による）
- 敷地 西北角（C）…建築・駐車スペース（不必要）…目隠し（垣根・塀・新庵による）
（B）（C）の建築は新建材に依るものとはいえ、新しい建物である。
- 〔第2次スケッチ案①〕〔第2次スケッチ案③〕は（B）（C）を敷地外とする案である。
- （B）も（C）も垣根・庭木で目隠しする。
- 草庵の位置をアプローチから直接見えない建築（第1次案も然り）をめざすため（C）の東隣家とし、目隠しの目的を持たせる。
- 硯池はやや東に寄るが〔第1次案〕の位置・南西に寄る位相を考えて、硯池に水が充ちても飛石的な舗石と考え、アケビ棚がその上空を繋ぐ案が実施案に生かされる結果を得た。
- 敷地範囲が減少することによる案自体の理想をなくさせないこと。理想を矮小化しないこと。
- 〔第2次スケッチ案②〕は〔第2次案〕状況で〔第1次案〕で理想としたものが、どこまで投影できるかを探る案であり、硯池の役割（かたむきと大きさと位置）と、草庵前の余白（広がり）の模索の痕跡図である。
- 水鏡・石鏡・森（草）鏡と連なる記憶のデザインが場所の記憶と重なった 場 としての表現であるかという命題となった。
- 場所と地勢の理解の中で述べた如く、東南角の一隅は元の森田邸の一隅ではあるが現在の農家・離れ屋・庭・垣根の具合まことによく、景観的な視点から、建築と庭は補修のみと思考した。

7 補修の概要（農家・離屋）

屋根 瓦 イブシ瓦の取替え（美濃焼）

金属 カラーステンレス t0.4 色彩 無彩色 明度
暗に依る一文字書き替え